The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	青年期および成人期の自立・自律性の検討ー世代間差と対人依存欲求および自尊感情との相互関連性の観点からー
Author(s)	菱田, 陽子
Citation	大阪大学, 2023, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/93013
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　菱　田　陽　子　）	
論文題名	青年期および成人期の自立・自律性の検討―世代間差と対人依存欲求および自尊感情との相互関連性の観点から―

論文内容の要旨

【背　景・目　的】

自立（independence）は他者から独立して主体性を持つという内容だけでなく、適度に他者に依存するという要素も含まれることが近年の研究で明らかになっている（福島（1997），Ryan ＆ Lynch（1989））。これらの報告により，自立に含まれる依存は自立と対立的なものではなく，適応的な依存であることが明らかにされている。自立と関連した概念に自律（autonomy）がある。本研究では，相互に関わりあう自立と自律を自立・自律性として「自立・自律性とは，親・大人から自立し，親，家族，教師，友人などの他者から行き過ぎない支援を頼る適応的な依存を有し，個性やユニークさとして示される個人の独自性を意味するものとする」と定義している菱田・荒木（2021）の定義を用いて，適応的な依存の概念を含んだ自立・自律性に関する尺度を作成し，世代間の違いと，自立・自律性と相互に関連性のある対人依存欲求および自尊感情との関係について検討することを目的とする。

【方　法】

本研究は，「グローバル化する現代社会に生きる若者や成人の価値と規範に関わる意識についての研究（金沢大学先魁プロジェクト「グローバル時代における若年世代の価値と規範に関する人間科学（研究者代表：轟亮，2016-2017年度）」として合同調査の為作成された質問紙を使用した。対象は，47都道府県の10代（18歳以上）38人，20代308人,30代424人，および40代530人の1,300人（男性661人，女性639人，平均年齢35.69歳）とした。データ収集は，マイボイスコム株式会社を通じたWeb調査により実施した。調査実施期間は，2017年2月17日（金）～19日（日）。倫理的配慮については，金沢大学人間社会学域「人を対象とする研究」に関する倫理審査委員会において，承認番号2016-10として，承認された。尺度は①自立・自律性尺度（菱田・荒木（2021）による35項目7因子構造の尺度），②対人依存欲求尺度（竹沢・小玉（2004）による20項目2因子構造の尺度），③自尊感情尺度（Rosenberg(1965）の日本語版である自尊感情尺度（山本・松井・山成,1982）の尺度）を使用した。

【結　果】

適応的な依存と甘えに注目しつつ，自立・自律性についての各因子(下位尺度)毎に，一元配置分散分析をおこない青年期，30代，40代の各群間に差があるかどうかを検討した。その結果，５因子(「独自性」「甘え」「影響受けやすさ」「過剰な頑張り」「感情統制」)で，有意な差がみられた。「独自性」は，30代のほうが，青年より有意に高く，「甘え」は，40代のほうが，青年より有意に高く，「影響受けやすさ」は，30代，40代のほうが，青年より有意に高く，「過剰な頑張り」は，30代のほうが，青年より有意に高く，「感情統制」は，青年，30代のほうが，40代より有意に高かった。次に，各自立・自律性因子と対人依存欲求および自尊感情との相関係数を算出したところ，各自立・自律性因子と対人依存欲求（「道具的依存欲求」「情緒的依存欲求」）および自尊感情（「自己肯定感」「自己否定感」）の間に多くの相関が認められた。さらに，各自立・自律性因子を従属変数とし，対人依存欲求因子・自尊感情因子を独立変数として重回帰分析（ステップワイズ法）を行い，自立・自律性因子と，対人依存欲求および自尊感情との関係を検討した結果，多くの有意な関係を確認できた。

【結　論】

1.自立・自律性は，発達や環境と関わり甘えとは異なる適応的な依存性の側面を有することが明らかになった。2.自立・自律性の7因子の内「甘え」「影響受けやすさ」以外の5因子（「独自性」「将来展望」「過剰な頑張り」「感情統制」「自立認識」）が「自己肯定感」と関わっていたことから，自己肯定感が自立・自律性の獲得に関わりがあることが示唆された。3.「自己肯定感」は，適応的な依存を内容とする「過剰な頑張り」因子と正の関わりが示されたことから，自己肯定感が高ければ，適応的な依存行動がなされると考えられた。適応的な依存ができれば，竹澤（2009）が示したように，自信を持つことができ，できなかったことができるようになり，自己成長感を感じ，自立・自律性が高まる結果になることが示唆された。

様式７

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　菱田陽子　）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
	主査　教授	松崎秀夫
	副査　教授	大島郁葉
	副査　教授	小林宏明

論文審査の結果の要旨

「自立(independence)」は他者から独立して主体性を持つという内容だけでなく、適度に他者に依存するという要素も含まれることが近年の研究で明らかになっている。これらの報告により、自立に含まれる依存は自立と対立的なものではなく、適応的な依存であることが明らかにされている。自立と関連した概念に「自律（autonomy）」がある。本研究では、相互に関わり合う自立と自律を「自立・自律性」として「自立・自律性とは、親・大人から自立し、親、家族、教師、友人などの他者から行き過ぎない支援を頼る適応的な依存を有し、個性やユニークさとして示される個人の独自性を意味するものとする」と定義している菱田・荒木(2021)の定義を用いて、適応的な依存の概念を含んだ自立・自律性に関する尺度を作成し、世代間の違いと自立・自律性と相互に関連性のある対人依存欲求および自尊感情との関係について検討することを目的とした。

本研究では、47都道府県の10代～40代の1300人（男性661名・女性639名、平均年齢35.69歳）を対象に、web調査で実施された。質問紙は、金沢大学先魁プロジェクト「グローバル時代における若年世代の価値と規範に関する人間科学（研究者代表：轟亮）」の「グローバル化する現代社会に生きる若者や成人の価値と規範に関わる意義についての研究」で合同調査のために作成された質問紙を用いた。尺度は①自立・自律性尺度（菱田・荒木（2021）による35項目７因子の尺度）、②対人依存欲求尺度（竹沢・小玉（2004）による20項目２因子構造の尺度）、③自尊感情尺度（山本・松井・山成（1982）によるRosenberg(1965)の日本語版尺度）の３つから項目が用いられ、各因子間の有意差を検討する分散分析と相関解析を行った。

その結果、自立・自律性の各因子では「独自性」「甘え」「影響受けやすさ」「過剰な頑張り」「感情統制」の5因子で有意差が認められた。とくに独自性・甘え・影響受けやすさ・過剰な頑張りは30代・40代のほうが10代・20代より有意に高いが、感情統制は10代～30代のほうが40代より有意に高かった。相関解析では自立・自律性の各因子と対人依存欲求および自尊感情の間に多くの相関が認められ、特に自立・自律性の７因子のうち５因子が自己肯定感と有意な関係にあり、「過剰な頑張り」と自己肯定感に正の相関があることが重回帰分析でも確認された。

以上より、自立・自律性は適応的な依存性の側面を有し、その獲得には自己肯定感が関わっていて、自己肯定感が高ければ適応的な依存行動がなされると考えられた。すなわち、自己肯定感によって適切な依存行動がなされ、自信を持ち、自己成長感を感じることで自立・自律性が高まることが示唆された。

上記の通り、本研究論文では自立・自律性の対人依存欲求および自尊感情との関係について、1000名を超す対象者からのデータをもとに世代間での検証を進め、自己肯定感の形成に引き続く適切な依存行動によって自立・自律性が高まる可能性を明らかにした。以上の成果は、発達に伴う自立・自律性のなりたちについて新たな示唆を与えるものであり、当研究科の学位授与に値すると考えられる。